

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
あさみ せいこ 浅見 栖子	女 性	79歳	13歳	富岡中部

女学校1年生

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

名古屋の覚王山かくおうざんで、祖父と空き地に野菜の種をまいていました。大好きなおじいちゃんといつもいっしょでした。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

父からラジオ放送で聞くように言われました。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

よく意味が分からなくて、何か変わったことがあったと思いました。父は、「日本が戦争に負けた」と非常に悔くやしがっていました。初めて電灯がつき、明るさと開放感に満ちていました。

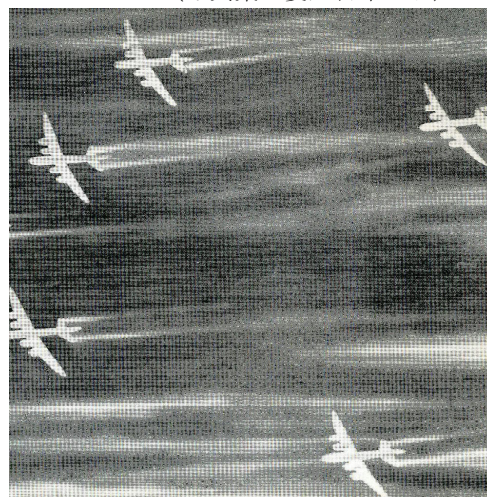
④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「名古屋大空襲」
だいくうしゅう

(写真集 愛知百年より)

私の実家は、名古屋市の今池です。5人兄弟の4番目ですが、当時は兄弟がみんなバラバラでした。姉は教員になったばかりで、学童疎開そかいで春日井の高蔵寺のお寺へ子どもたちを連れて行きました。そのまま、終戦まで帰りませんでした。妹は親戚しんせきに預けられ、長男、次男は志願して予科練に入り、私だけが家にいました。

女学校に入った1年生の終わり頃、1年生全員が学徒動員され、日本ガイシという工場で働きました。私は、品質管理の仕事をしていました。その時は、覚王山にある祖父の家から通っ



▲ 名古屋を空襲するB29の編隊

ていました。空襲が激しくなり、バスも動かず、「危ないから行くのをやめなさい。」と祖父に言われて家にいました。

昭和20年2月の名古屋大空襲、私の生家は全焼しました。その夜は、今までと比べものにならないくらいのB29が飛来し、窓ガラスがビリビリ音を立ててゆれました。照明弾しょうめいだん、機関砲きかんほうが鳴りひびいて、空は火花で散りばめられました。祖父は、私を抱きしめてくれました。

「今池の方はまっ赤だから、もうダメだな。夜明けを待って見に行こう。」

凍てつく2月の寒い朝、二人はだまって歩いていきました。途中からあちこちに炎が見え、焼け落ちた家々、異様な臭いいようにおや空気とちゅうに、すごいことがあったなと直感しました。

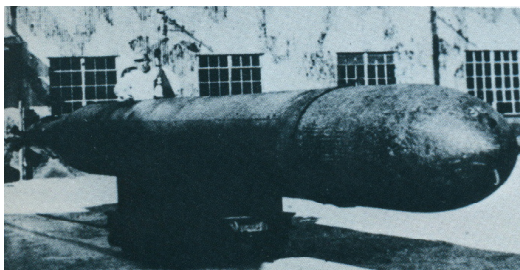
「全焼だ。何も残っていない。ここが^{せい}栖ちゃんの家があったとこだよ。」
ポツリと言いました。その時、^{ぼうくうごう}防空壕の中から真っ黒な顔をした人が出て来ました。母でした。そして、父もいました。
「ああ、よかった。」あとは何も覚えていません。私の終戦の日です。

○ 兄のこと

長男は昭和2年生まれで、終戦当時は18^{さい}歳、次男は16歳でした。二人とも無事に復員しました。次男は^{かすみ が うら}霞ヶ浦にいましたが、長男は瀬戸内にいて、人間魚雷^{ぎょらい}に乗ったのです。長男は、一度家に^{もと}戻ってきました。予科練の軍服を着て、^{けん}剣を下^{りつ}げ、とても立派に見えました。きっと、魚雷で体当たりする前に、家族に最後のお別れに行く許可がおりたのでしょう。予科練の仲間が次々と^{とつこう}特攻で散^こっていくなか、長男も二人乗りの魚雷に^の乗り込み、瀬戸内海へ向けて^{せ と ないかい}出撃^{しゅつげき}しました。まさに^{かんいつぼつ}間一髪^{れんらく}のところで^{おそ}連絡が入り、港にもどって終戦の知らせを聞いたのです。あと、1日でも終戦が遅^{おそ}かったら、命はなかったと長男は言っていました。

終戦後、何の知らせもないまま、兄たちはいきなり帰ってきました。生きているのかどうかさえ分からなかったので、^{おどろ}驚きました。兄弟がみんな無事にもどり、家族がにぎやかになりました。^{やさ}優しい兄たちでしたので、一人でさみしい思いをしていた私は、本当にうれしかったです。姉も^{もと}戻り、家族がそろそろ幸せをかみしめました。今池の家は焼けてしまいましたが、^{きずな}覚王山^なの家があったおかげでした。

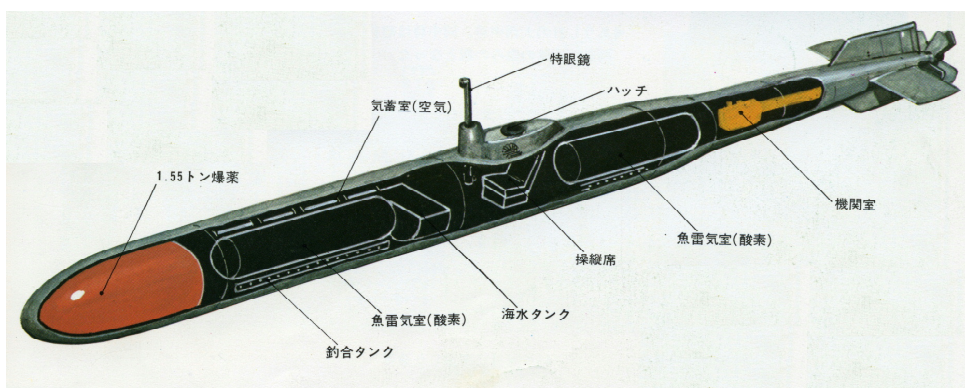
予科練の戦友は絆はとても強く、2年前に亡くなるまで毎年集まっていました。今、私はこわいものは何もありません。ただ、戦争だけはやめて下さい。



▲ 海の特攻兵器 人間魚雷「回天」

人間魚雷「回天」^{ぎょらい}

全長 14.75 m 胴直径^{どう} 1 m、総重量 8.3 トン
海軍の特攻兵器。大型潜水艦^{せんすいかん}の背に4～5基乗せられて出撃し、目標近くで水中発進、体当たり^{こうげき}攻撃を行った。



「昭和史第7巻（研秀出版）より」

予科練と特別攻撃隊



▲ 神風特別攻撃隊の出撃 知覧基地

「昭和の歴史（研秀出版）より」

あこがれの予科練

戦時下の男の子の理想は、軍歌や戦争映画で英雄として取り上げた少年飛行兵や少年戦車兵になることだった。その花形は、海軍飛行予科訓練生（通称予科練）だった。この予科練は、甲種（中学校4年修了者）と乙種（小学校高等科卒業生）からなり、甲飛練は約14万8千人、乙飛練は約3万5千人に達したといわれる。昭和19年秋に、神風特攻隊による特攻戦法が開始されてから、予科練出身者の大多数は、この体当たり攻撃にあてられた。

予科練の志願者は、昭和18年から急増した。全国の中学校へ少年兵志願者が割り当てられたこともあったが、少年たちの多くは家族の反対を押し切って、自らの判断で志願した。15～17歳の若者たちが、身体、学術、適性の試験を受け、選ばれた。

一方で、役場からの割り当てに満たない時は、学校長命で候補者の家庭を訪問し、強力に勧誘したという。

<参考> 昭和の歴史（集英社）
新城地方教育百年史

早朝の特攻基地。再び帰ることのない出撃に、手を振る人たち。新聞は、特攻隊を大きくとりあげた。



▲ 昭和20年5月14日 朝日新聞

集 団 疎 開



▲ 新城への疎開児童（写真集「新城」より）

昭和19年3月、児童を空襲から守るため、学
童疎開が始まった。親せきを頼ることができない
児童は集団疎開した。新城国民学校では、19年
の4月から9月に児童数が162名増加した。

8月17日、名古屋花ノ木国民学校初等科の3
年生から6年生が集団疎開し、大善寺（新城）、勝
楽寺（東郷）、淵竜寺（大野）に集団疎開した。
受け入れ側も大変だったが、疎開した児童は、家
庭を離れたさびしさや乏しさの日々に耐えて集団
生活を送った。 「写真集 新城」より



▲ 疎開地に着いた学童 お寺や旅館などが宿泊所であり学校だった

「昭和史第8巻（研秀出版）より」

学童疎開を引率していた先生の話

「新城地方教育百年史」より抜粋・要約

疎開の時、学校から教材教具は持ってきたが、化学実験などは困り、新城国民学校で授業をした。2教室を借り、2学年ずつ入れ、黒板を二つに分けて授業を行った。空襲警報が出ると大善寺に引きあげ、境内の防空壕に入った。昭和19年の終わり頃から満足に勉強ができなくなり、午前中授業を行い、午後は買い出しの毎日だった。薪炭（たきぎと炭）、サツマイモ、野菜などは農業会を通じ、八名、千郷などの青年学校の農場へ大八車をひいてとりに行った。また、民家へも分けてもらいに行った。

当時の食事は、朝晩、大豆のご飯、昼はイモが普通だった。サツマイモの茎、とこ芋ももらってきて食べた。苦労して食べ物を手に入れるのを目のあたりに見て、児童たちは生産者に恩を感じ、食べ物に感謝の気持ちを持っていた。どんなものを食べても、まずいとは言わなかった。

20年になると、物資の不足はますますひどく、先生方は食糧を手に入れるため、自分の持ち物を交換したりした。先生方の苦労は並たいていではなかった。子どものケガや病気にも親代わりになって世話をした。こうした集団生活を通して、子ども同士のつながりは非常に強かった。